

1974年

青山学院創立100周年記念事業
青山学院大学体育会山岳部創部50周年記念事業

ヒマルチュリ遠征報告

青山学院大学ヒマラヤ遠征実行委員会

1974年ヒマルチュリ遠征報告

■目次

隊の構成	表 II
はじめに—ごあいさつにかえて—	1
計画のあらまし	2
ヒマルチュリ東面ルートを顧みて	3
難行した現地交渉—カトマンズでの準備—	4

神々の住処へ—キャラバンの記録—	6
遙かなる頂を求めて—登攀の記録—	10
食料計画の概要	20
装備計画の概要	21
遠征日誌	22
協力者名簿	23
会計報告	表 III
むすびにかえて	表 III



隊 の 構 成

隊長	栗林一路 (49)	(有)アイ・プロ	リエゾン・	Gupta Bahadur Rana (30)
副隊長	鈴木 武 (43)	協同木材貿易(株)	オフィサー	
総務会計	戸張至聖 (34)	(株)日刊工業新聞社	サーダー	Jangbu (27) Pangboche
装 備	土田紘介 (30)	(有)スタジオL	コック	Ang Tsering V (49) Namru
記 録	沢口 登 (25)	沢口写真館	シェルパ	Lhakpa Norbu (26) Pangboche
輸 送	岩井胤夫 (27)	日進化成(株)		Pemba Dorjee (25) Rolwaling
食 糧	藤沼裕司 (27)	(有)スタジオL		Pasang (30) Soluphera
食 糧	須藤 護 (27)	(株)吾嬬製鋼所		Mingma Norbu (24) Lukla
涉外輸送	三原日出男 (24)	経営学部学生	キッチン・	Tsering (24) Darjeering
医 療	岡野達朗 (23)	経営学部学生	ボーイ	
装 備	小林伸二 (23)	理工学部学生	ローカル・	Gyamzo (28) Lho
食 糧	藤田文明 (22)	経済学部学生	ポーター	Tsering Dorjee (20) Rolwaling
輸 送	加藤信夫 (22)	経営学部学生		Tsering Wangdi (30) Namru
梱 包	石黒伸幸 (22)	法学部学生		Khunsang Namgyal (25) Namru
医 師	植木彬夫 (27)	東京医科大学病院	メール・	Chandra Bahadur Lama (25)
ゼネラル・アドバイザー			ランナー	
	徳久球雄 (44)	青山学院大学教授		

はじめに

—ごあいさつにかえて—

青山学院大学ヒマラヤ遠征実行委員会は、母校青山学院創立100周年、山岳部創立50周年を記念して、ネパール・ヒマラヤに「青山学院大学ヒマルチュリ遠征隊、1974」を送りました。

私たちが目標としたヒマルチュリ(7,893 m)の東壁は、かつて日本山岳会隊が試みて果たせなかったルートですが、残念ながら私たちも7,050 mの地点に達しながら、厳しい気象条件のために退却せざるをえませんでした。

思えば1965年、ネパール国東部の未踏峰ラシャールに遠征を計画し、いざ実行という段階で中印国際紛争の影響のために中止して以来10年になります。その間、アラスカやインドで実力をたくわえ、ついにヒマラヤ遠征にこぎつけました。

今回のヒマルチュリは、登頂こそできませんでしたが初めてのヒマラヤ遠征で、15人の隊員が4ヶ月におよぶ試練に耐え、一人のケガもなく、全員無事に帰国できたことは、隊員相互のチームワークもさることながら、関係会社、校友、OB諸氏の物心両面にわたる多大なご協力のたまものであります。ここに深く感謝の意を表わすしだいです。

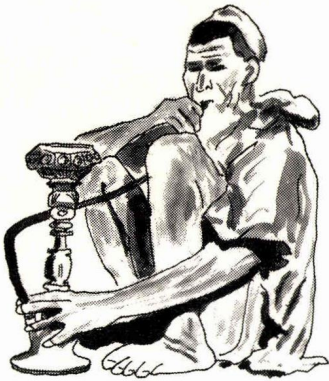
青山学院大学ヒマラヤ遠征実行委員会

後援

青山学院院長	大木金次郎
青山学院大学学長	石田武雄
青山学院大学体育会会長	岩元岬
青山学院大学体育会山岳部部长	徳久球雄

実行委員

青山学院大学体育会山岳部OB会会長	坂岡奈保志
副会長	福島昌夫
副会長	鈴木弘
幹事長	木村太三郎
青山学院大学体育会山岳部主将	小林伸二
登山隊派遣資金募金委員会委員長	坂岡奈保志
副委員長	草野順夫
ヒマルチュリ登山隊長	栗林一路



計画のあらまし

1971年に計画を建て始めた段階においては、初めての遠征ということでカンジロバ・ヒマール、チューレン・ヒマールが候補の山であったが、1973年夏にグルジャ・ヒマールで登山申請を行ない、同年秋に許可された。

ところが先発隊出発（1974年7月）の直前になって、ネパール国内にカンパ族の叛乱がおこり、グルジャ・ヒマールは入山禁止となり、「代替の山を申請すれば許可する」とのネパール外務省からの公電で、急拠目的地を変更せざるをえなくなった。この交渉を先発隊が現地でおこなった結果、担当官カナル氏よりヒマルチュリ（7,893 m）が許可されたのである。

この電報が東京に入ったのが本隊出発（8月30日）の20日まえという緊迫した時期であったため、登山計画を全面的に変更することが大変であった。グルジャ（7,193 m）とヒマルチュリは、高度差は700 mであるが、キャンプ数が5から6へ、酸素ボンベの数は10本から30本へ、登山日数は35日から50日へと大幅にふえ、したがって食料・装備とも量が拡大したが、何とか予算内でやりくりした。

隊の構成は、隊員15人（含ドクター）とリエゾン・オフィサー（政府派遣）1人、シェルパ5人、コック1人、ハイポーター3人、キッチンボーイ1人、メール・ランナー1人で、これらはヒマラヤン・ソサエティを通してカトマンズで契約し、ポーター（約180人）はすべてトリスリ・バザールで雇うことにした。

本隊がカトマンズに到着した時点では、まだキャラバン・ルートが迂回路のルピナラ経由ということになっていたもので、さらに外務省と交渉して、ついに通常かつ最短のコースであるブリガンダキ（渓谷）ルートを獲得した。

東尾根下部にベースキャンプを設定すれば、あとはJAC（日本山岳会）ルートをはぼトレースし、通称ジャ

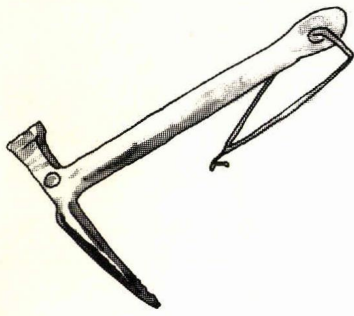
ンプ台という東壁直下の台地にキャンプをすすめ、そこからキャンプをもう一つ出して頂上をねらう計画であるが、できればJACの試みた大氷壁以外にも、登りやすいルートを探して、頂上につながる尾根へ出ることを想定した。

それには、ジャンプ台附近よりリダング氷河側へトラバースしてから尾根に出るか（このルートをとると頂上へは遠くなる）、逆にチューリン氷河側に寄って直登ルートを見つめるか、この二つが考えられた。いずれにしても、テントがもう一つほしいし、それに成功しても頂上までの往復途上でのピバークが予想された。

考えられるタクティクスとしては、このへんまでで、あとは現地に臨んでからの判断と、シェルパのサポート力がどのくらいあるかにかかっている。はたして長大な東尾根にキャンプを6つも出す長いボッカに、まず隊員が耐えられるかどうかである。それは意志の問題のほか、酸素欠乏などによる高度障害が彼らの体力をどれだけ低下させるか、ということも関係してくる。

雨期の終らない9月初旬にカトマンズを出発してベースキャンプを中旬につくり、ボッカを含めて約7週間のうちに登頂のチャンスが与えられるか、どうかであった。本来ならば、カトマンズを8月中旬に出発したいところであったが、前述のような事情で、9月10日になってしまった。すべての外国隊そしてプモリヤラムジュンの日本隊も、すでにカトマンズをあとにしていた。こうした限られた条件のなかで、私たちの隊は、できる範囲内での可能性を一つ一つ追っていくよりほかはなかった。なお、登山計画外ではあるが、日本キリスト教海外医療協力会のお手つだいとして、ネパールで医療活動をされている岩村医師のもとに医薬品を届けた。

（記：栗林）



ヒマルチュリ東面ルート

を顧みて

ヒマルチュリの東面からの登攀は、頂上直下の大氷壁の下から始まるといっても過言ではない。それほど、この東尾根ルートはここで一変する。この氷壁は頂上稜線から急傾斜で1,000 m切れ落ち、下部はしだいに緩くなって6,800 mのジャンプ台につづいている。雪を付けているが、その下は硬い青氷である。上部は頂上稜線に大雪庇がせり出し、一見して登攀には困難をとまなうことが予想できる。過去1959年プレ・モンスーンに日本山岳会隊、1974年プレ・モンスーンにイタリア隊がいどんだが、いずれも7,200 m付近で敗退している。そして我々も退けられた。登頂の成否はこの壁にどれだけ力を注ぎ込めるかにかかっている。数人のアタック隊員にまかせるような方法ではおそらく不可能と思われる。規模こそ小さいが、技術的にはエベレスト南西壁に劣らぬむずかしさを持っている鉄の時代の壁といえる。可能と思われるルートは2本あり、いずれを採るかは、雪の付着しだいで選択することができると思う。いずれにしても可能なかぎり氷壁の上部にキャンプを作ることが必要である。

この東壁登攀の基地第5キャンプに食料・装備を送り込むには、シュラン谷のBCから、およそ6,200 mの東尾根上の大雪原を、直線距離にして20kmにわたって荷上げ作戦を展開しなければならない。我々を含めてこのルートを用いた3隊は、いずれも東壁までのアプローチに多くの日数を費やし時間切れになっている。ラニー・ピーク付近をのぞいて技術的にはさして問題はみつからないが、予想以上にやりにくいルートである。キャンプ間の距離を目いっぱい長く取らねばならなかったにもかかわらず、高度をかせぐことができない。高度順応を計るには都合の悪いルートである。東壁へのアプローチとしてチューリン氷河からのルートが考えられるが、上部からの眺めによるときわめて悪く、通過不能と思われる。イタリア隊は当初ニャックからチューリン氷河にルートを探したが、BC設営後ルート工作に失敗して引返し、東尾根ルートに切替えている。おそらくたいへんな氷河で

あったと考えられる。東側のリダング氷河から東尾根に出るルートを見つけることも、まず不可能であろう。

このわずらわしい長い東尾根を、できるだけ消耗せずに短期間にあげて、東壁に十分な力と日数を集中させることが登頂のキーポイントになる。我々の場合は、ブリガンダキの通行許可が遅れたために、BC建設が9月下旬にずれ込み、かなりのスピードでキャンプを出していたにもかかわらず、モンスーン明けの好期を本ぼんの東壁にもっていくことができなかった。現地ナムルーのポーターによると、この地域は10月20日頃に大雪が数日降り続き、そのまま冬に向うという。ポスト・モンスーンでは、9月末日までに東壁下に相応な基地を造るようにならなければならないと思う。そして10月初旬の無風快晴の好期をのがさないようにするのが肝要である。この期の東壁の状況はプレ・モンスーンよりも良いようである。雪崩の心配も少ないと思う。

我々の失敗の直接の原因は、大豪雪によるものであった。10日早くBCができていれば、射程距離内に入っていたのではないかと思う。しかしながら、グルジャ・ヒマール(7,193 m)の規模で8,000 mに近いヒマルチュリまして東壁にいどむには、困難を伴ったことはいうまでもない。資金の都合でシェルパの増員が不可能であったために、東尾根の荷上げにおける隊員の負担は大きかった。また、日本から送った低所用の食料のほとんどを高所用に使い、キャラバンを含めC3まではすべて現地食に頼ることになってしまった。うるおいのない食事でがまんしなければならず、隊員の体力の消耗はげしかった。東尾根ルートはC3までに限れば現地ナムルーのポーターが使用できると思う。装備にゆとりがあれば、現地ポーターの投入を考えたいところであった。

ヒマルチュリは西面ルートから1960年に慶応大学隊によって登られている。できることならこの東壁ルートも日本人の手によって登られることを望んでいる。

(記：戸張)

難行した現地交渉

—カトマンズでの準備—



モンスーンの厚い雲の切れ目から、以外なほど近くに箱庭のような風景が見えてきた。飛行機はがくんと高度を下げた。いよいよ待望のカトマンズである。しかし、心の底から喜ぶ気にはなれなかった。

私達の遠征隊はカンバ族の騒乱により目標の山を失っていたのである。先発隊（藤沼、三原、加藤、石黒）は登山許可を取得する仕事から始めなければならなかった。神秘的な古都カトマンズに心を奪われる余裕もなく、到着の翌日8月2日に外務省登山局担当官カナル氏を訪問した。

振回された交渉

出発前の話では東部ネパールの山に限って相談に応じるとの情報が入っていたので、カンチェンジュンガ山塊の衛星峰に狙いを定めて交渉した。今回は特殊なケースなので、ネパール政府が許可している41座以外の山に登ることができるのではないかと考えていたが、甘くはなかった。従来どおり規定の山から選ばなければならなかった。

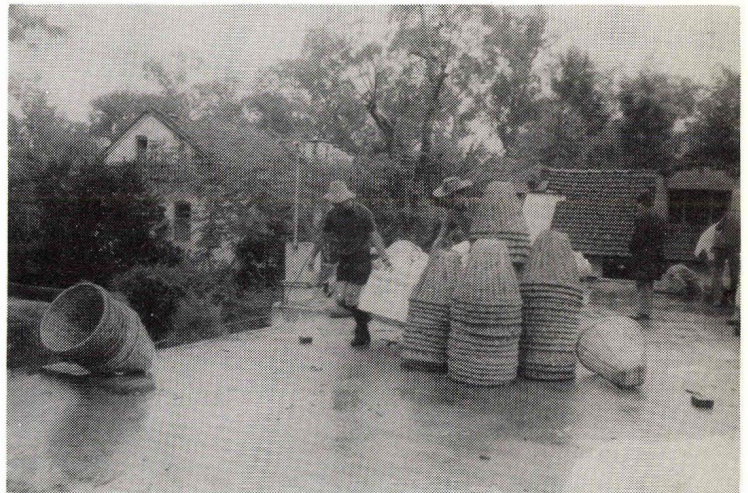
カンバの問題でマナスル以西の山がすべて禁止されたので、我々の対象になる山はわずかに10座である。そのうち6座は決っており、残っているのはヤルンカン、ジャヌー、ローツェ、ヌブツェのみであった。これらはいずれも我々の遠征隊の規模では手の届かぬ巨大な峰であった。登山局でもこの4座はキャンセルされた隊の代替としては不適當なので、他の隊に許可している山でも、両者の話し合いさえつけば許可を与えたい意向であった。

そこで我々は、出発前に研究していたカンチェンジュンガ山塊にあるカンバチェンで話を進めた。カンバチェンはユーゴスラビア隊が登ることになっていた。同隊のルートを開くとヤルン氷河からであるという。我々は北側のラムタン氷河から頂上をめざしたい旨を申し入れた。後日カナル氏を交えてユーゴ隊と話し合うことになった。

約束の日にカンバチェンの登山申請書をもって、カナル氏に会いにいったが、ユーゴ隊の隊長のカトマンズへの到着が遅れているという理由で、約束は反古にされてしまった。また振出しにもどってしまった。カトマンズにきてから10日も経過していた。東京では出発をまじかにして、心配しているだろうと思うと、いたたまれなくなった。どうしても駄目だったら8,000 m峰でも止むをえまいと思ったりした。とにかくユーゴの隊長を待つことにした。

ヒマルチュリの許可ができる

ところが、その日のうちに日本大使館を通じて、ヒマルチュリを解禁するという連絡が入った。禁止されていた山であり考えてもいなかったので戸惑った。しかしこれ以外に我々に登れる山はない。すぐに東京に連絡すると同時に登山申請書を提出した。しかし、これは重大な問題をはらんでいた。キャラバン・ルートが南面のダロンディ・コーラのみ指定されていたからである。このルートではチューリン・コーラから登らなければならない。チューリン・コーラがルートになるかどうか情報は皆無であった。むずかしいとカナル氏に話したら、ルピナ・ラからパウダー峰を越えて登ればよいといわれた。ブリガンダキ以外のルートでは登ることは不可能であると重ねて説明し、ブリガンダキを通行させてほしいと嘆願した。西面のマルシャンディ・コーラはカンバの問題でま



野菜類の運搬にポーターがかつぐドッコ

ったく見込はなかった。

サーダーを決める

一方、シェルパについては、事前に連絡して予約した者が、我々の遠征隊の動向が不明なため、ソクロープの実家に帰ってしまったので、新たに手配しなければならなくなっていた。頼りにしていたヒマラヤン・ソサエティのシン氏がルクラで死亡するというアクシデントがあり、この問題も暗礁に乗りあげてしまった。大分気をもんでいたが、知人の紹介状を持って我々を直接たずねてくるシェルパが出てきた。最終的には、その中からサーダーとして、女性マナスル隊で活躍したジャンプを、そしてシェルパ4名を雇い入れた。

ブリガンダキの通行許可

本隊は悪天候のため予定より1日おくれて9月1日にカトマンズに到着した。まだキャラバン・ルートは決まっていなかった。隊長とともに、カナル氏に幾度目かの嘆願におもむいた。カナル氏は、ブリガンダキ上流のラルキヤ・ラ付近に少数のカンバ族が潜んでいるので、許可できなかったという理由とともに、見通しはしだいに明るくなってきていると話してくれた。許可になることを願いつつ、最終的な出発の準備を進めた。9月6日になって、カナル氏から連絡が入った。「ブリガンダキの通行を認めることにした。手続に來い」というものであった。ねばった甲斐があった。すでに公布されていたパーミッションを書替えてもらった。これで早急に出発することができる。出発は10日に決定された。そして180人余のポーターを雇用するため、鈴木副隊長以下隊員2名と現地の友人ダクワ氏が先行し、トリスリ・バザールに向うことになった。

ポーターの雇用

この地域に入る遠征隊は我々だけであったので、ポーターの雇用は容



梱包作業 約30kgの荷物が183箱になった



隊員は2台のジープに分乗してトリスリ・バザールに向かう

易であろうと思っていたが、我々が当初提示した日当10ルピーでは、折合いがつかず難渋した。15ルピーでなければ駄目だというナイケ（ポーター頭）達との交渉は決裂してしまった。我々に同行してくれていたネパールの友人ダクワ氏と同氏の現地知人サケ氏の骨折で、結局12ルピーで独自に集めることになった。

遠征隊が到着していることを聞いて、周辺の部落からポーター達は集まってきていた。我々とナイケの交

渉が決裂したことを知って、帰ってしまった者もいたが、どうしても仕事のほしいポーター達は残っていた。サケ氏の説得が開始された。結果は良好で、12ルピーでも喜んで引受けてくれた。

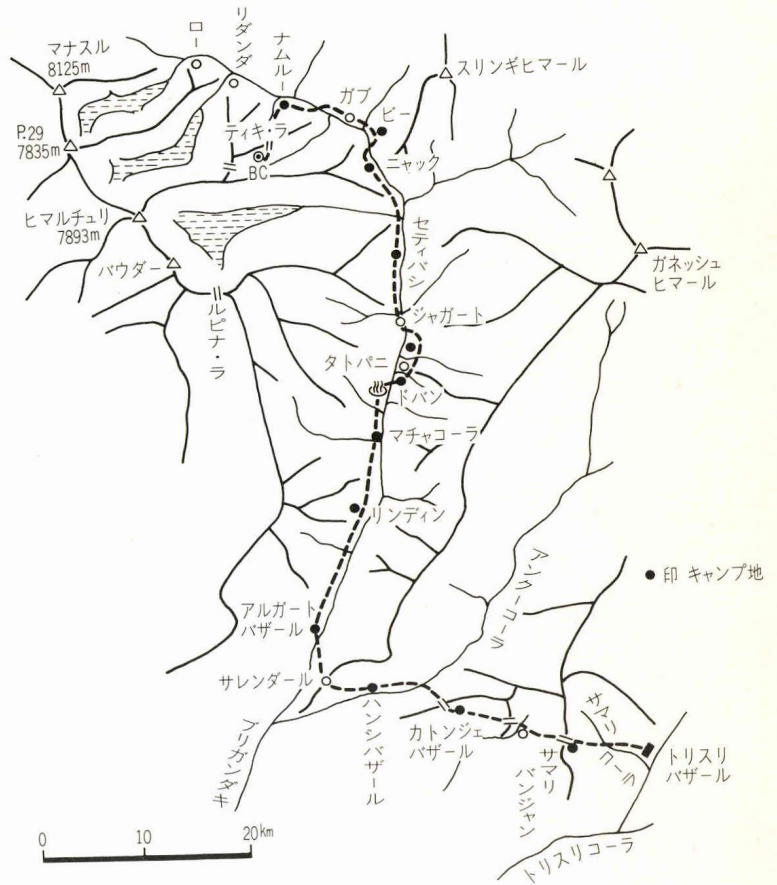
キャラバンの出発日に頭数が足りず、足並がみだれた嫌いはあったが、ポーターのストライキなど心配したトラブルは一度もなく、最終12ルピーで無事にベース・キャンプに入ることができた。（記：藤沼，三原）



神々の住処へ

—キャラバンの記録—

キャラバン・ルート図

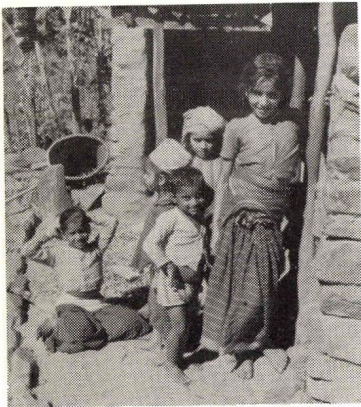


9月11日、はげしい雨が降り続いていた。ここトリスリ・バザールには、昨日6トンの荷物といっしょに1台の8トントラックと2台のランド・クルーザーでやってきた。モンスーンの長雨に崩れた道路を無理に通ってカトマンズの北にあるヒマラヤの展望台のカカニの丘を越えてきた。晴れていればどんなに感嘆したことだろう。ヒマルチュリも見えないに相違ない。

私達は5年前にインドが造ってくれたという発電所の上の台地にあるゲスト・ハウスに泊っていた。

豪雨の中の出発

夜が白々と明けて間もないというのに、ポーターが集まってきた。ダクワ氏とサケ氏に説得されたポーター達である。望みどおりの数が来ているかどうかわからない。恐る恐る数えてみた。どうやら半数ぐらいは確保できそうであった。これだけあればしめたものだ。隊を二つに分けてもよい。昨夜、「いくらかでも出発させた方がよい。隊が動いてい



ネワール族の子供たち

るのが知れば、ナイケに追い返えされたポーター達も戻ってきますよ」とリエゾン・オフィサーのラナさんが入れ知恵してくれた。彼はカトマンズ警察の30才の警部補で、きわめて事務能力のある男だった。キャラバン中、ポーターの登録や賃金の支払い事務をいっさい引受けてくれた警部補が窓口では、ずるがしいポーターもいいかげんなことにはできない。隊員やシェルパのことを聞かない連中も、彼の前では小さく

っていた。

まったく止みそうもないどしゃ降りの中を、10時になって第一陣が出発した。やはり、ラナさんのいうように、そちこちに点在する赤土の家の中から出てきた。昼までには手当てがつきそうに思えたが、雨のために出足は予想外に鈍く、最終グループが出発したのは、早い連中がその日の宿泊地サマリ・バンジャンに着いた時刻午後3時になってしまった。

さらに激しさを増した雨にずぶぬ

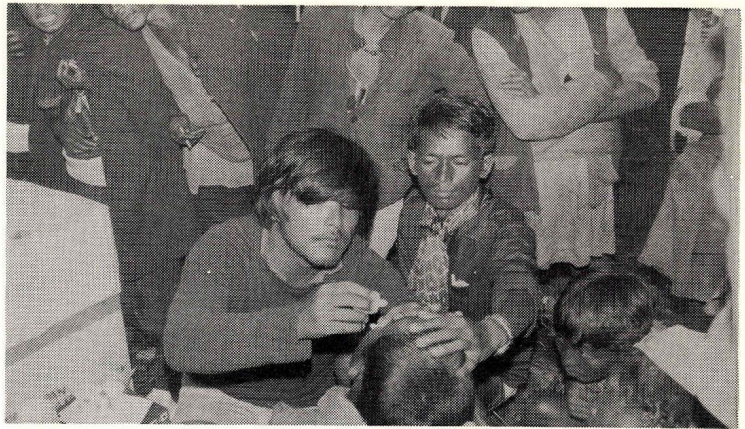
れになり、くるぶしまで潜るぐちゃぐちゃの泥に足をとられながら、サマリ・コーラ沿いの畦道を歩いていた。雨に氣勢をそがれたか、ポーターの足どりは遅々としていた。遅い出発にあたりはすっかり暗くなってしまった。サマリ・バンジャンのすぐ手前の登り道で、ポーター達は歩かなくなった。先着した隊員やシェルパがライトを持って駆けずり回ったが、ダダをこねた何人かのポーターは、あたりの民家に潜り込んでしまった。

初めてヒマルチュリを見る

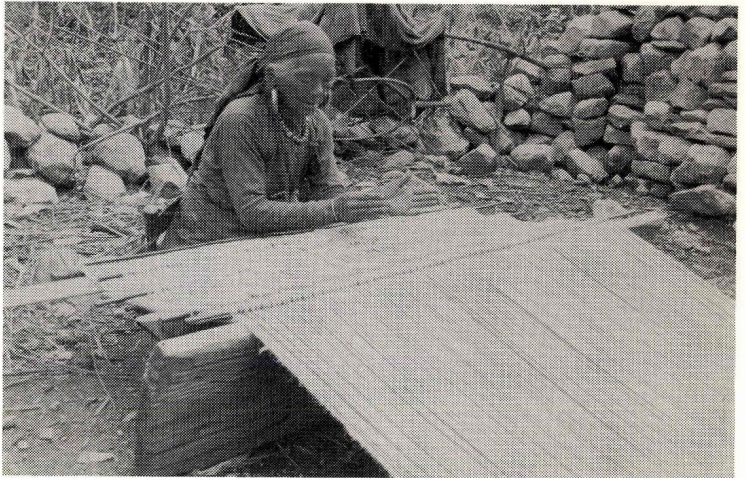
晴れるとポーターも余裕ができるのか、前日のような悲壮感はなく、歩みも順調になった。私達のポーターは、タマン族、グルン族、少数のチベットの総勢 183 人である。

キャンプ地につくと 4~5 人のグループが散り散りになってまずしいツェンパだけの夕餉の仕度にとりかかる。狭い谷間にゆらゆらのぼる幾筋もの紫煙は、一日の勤めを終えた安堵の気持を物語っているようであった。

マンゴーの林やバナナの実のなる尾根を越えて、小さなせせらぎを何度か渡って低い峠にかかると、突然目差すヒマルチュリが紺碧の空に突きささっているような姿をはじめて見せた。とくにカトンジェの峠からの西峰を登った勇姿は、アマダブラムと見間違ってもおかしくないほど鋭いものであった。ここから北方にどしりと構えるガネッシュ・ヒマールに吸い込まれるように下っていくと、アंक・コーラに出た。ヒマラヤの高峰に源を発し、人々に潤いと脅威を与えながら堂々と流れゆく姿は圧巻である。アंक・コーラを離れサレンダールの赤茶化した広い台地を横切ると、せりだす山肌のあいを窮屈そうに流れるブリガンダキがあった。大きな釣橋を渡ると、ブリガンダキ流域で最大の市場アルガート



ドクターは住民やポーターの診療に忙しい



カーペットを織るグルンの女
バザールであった。

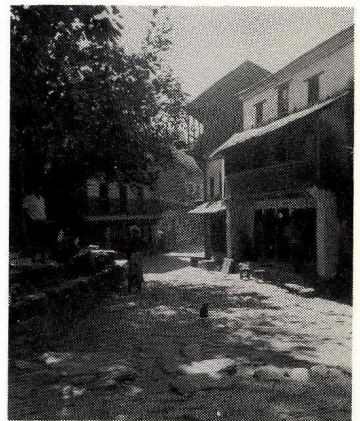
カンパに出会う

アルガート・バザールは古いポカラへの道とチベットへの道の分岐にあたり、商業活動はきわめて活発に行なわれている。学校もあり生徒達は我々が買物をするとき、上手な習いたての英語で、通訳してくれた。

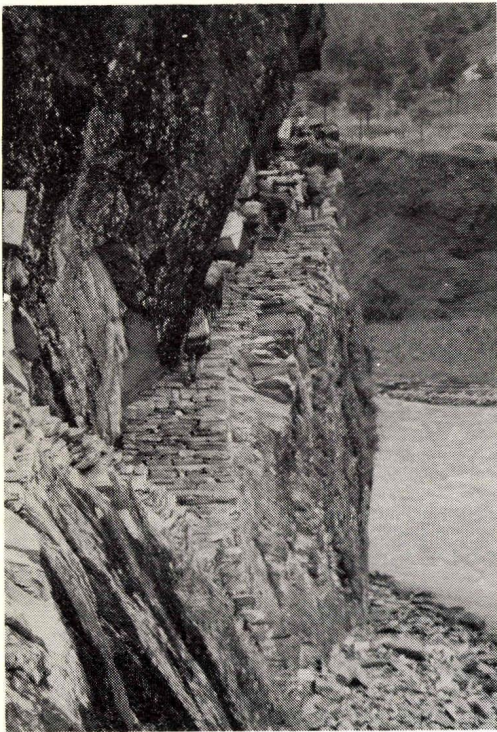
ここでポーターの大半を代え、ブリガンダキの谷間を北上していった。チベットとネパールを結ぶ主要な街道の一つといっても、田圃の畦道をバランスをとりながら歩き、またあるときは岩にへばりつくように進んでいった。ときにはロープを固定し

なければならぬ悪場もあった。

雨に濡れた暗い森の中で突然いか

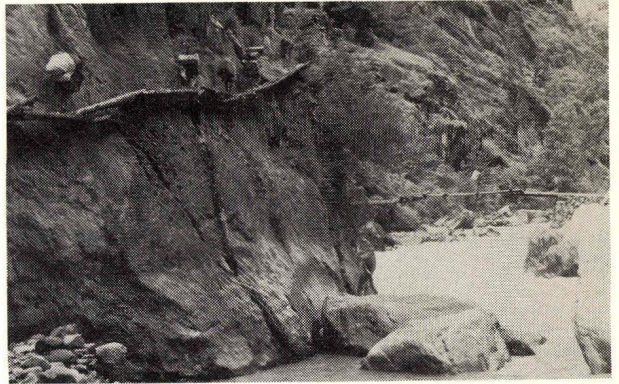


ブリガンダキ最大の集落アルガート・バザールの石畳

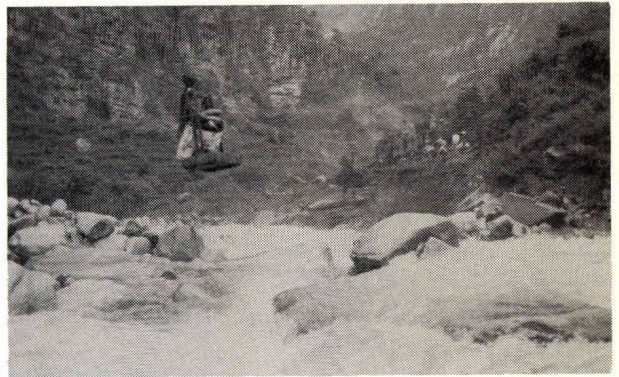


手造りの石の階段道

1日ばかりでドバン・コーラを渡る



名にしおうブリガンダキの嶮路



めしい銃を持った数人の兵士とすれちがった。将校らしいのがシェルパの一人を隊員と間違えて英語で話しかけてきた。シェルパもとぼけて英語で受け応えた結果によると、我我の隊が非常な迷惑を受けたカンパ族の一人を捕えて、カトマンズに護

送していく途中であった。兵隊は強そうに見えなかったが、カンパの目は鋭く不気味に光っていた。

濁流の綱渡り

降り続く雨に増水して、路に溢れ出した泥水をはねながら進むと、濁流に流されて橋を失なったドバン・コーラの出合に出た。ドバンの渡しはキャラバンのハイライトであった。対岸に渡された一本のワイヤーにかけてある二人乗りの木箱を、両方から結びつけた綱をたぐりながら往來するのである。最初のうちはかけ声も勇ましく面白がってやっていたが、200人となるとうんざりする。手の皮がむけて血がにじむころようやく全員が渡り終えた。短い谷間の一日はこれで終わってしまった。

ブリガンダキ沿いの道は谷間なので、絶壁のへつりが多い。その絶壁に見事にスレート状の石を積み重ね

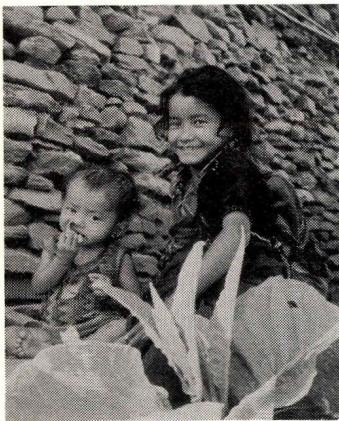
た階段上の道が造られていた。歩幅も適当であり、下手な舗装より足裏の感触がすばらしい。山あいに住む人々にとって唯一の交通網であると同時に通信網でもあり、大切にしている様子がよくうかがえる。新しい崩れが丁寧に補修されていた。

9月17日にジャガートに着いた。今までの赤土の家は、石造りになった。チベット人の部落に見えるが、まだここはグルン族の世界である。郵便箱や学校もあり、若い先生は流暢な英語を話した。ハイカラな格好をして“Made in Japan”といって得意気に見せにきた時計の日付はくるっていた。

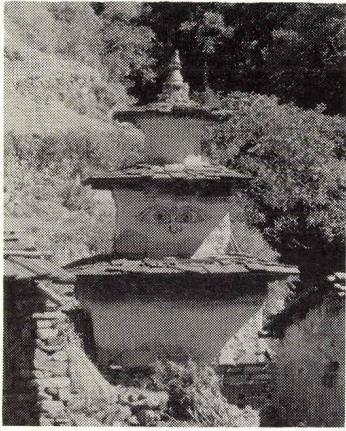
ここはブリガンダキ街道で最奥のバザールであった。隊員達は履きつぶした運動靴の替えを買い求めた。

チオルテンの世界に入る

谷もいくぶん開け、道はしだいに



グルン族の子供



ビーのチオルテン

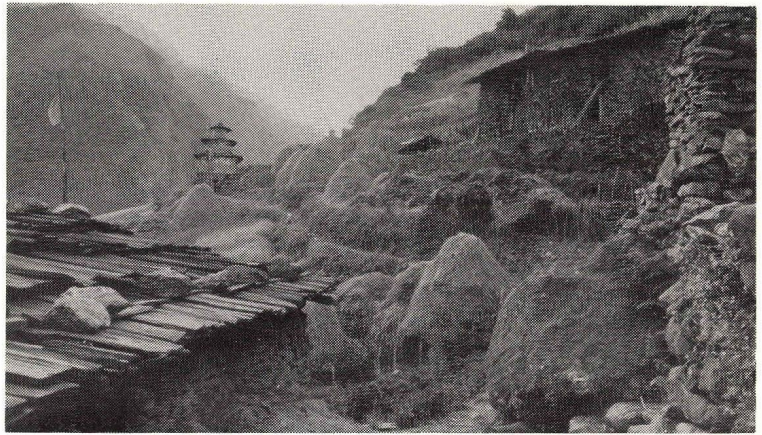
登っていった。猛々しいブリガンダキの流れも、心なしか静まってきたようだ。

チューリン・コーラの出合から急に登りはきつくなった。あえぎあえぎしばらく登ると、突然、はじめて見るチオルテンが現われた。さわやかな風がタルチョーを舞わしていた。そしてチオルテンをくぐると、そこはラマ教の世界であった。

チベットの人々はラマ教の深い信仰に支えられ、厳しい自然の中で乏しい収穫に頼り、質素に生活している。この地方では水害を免がれるために河床からかなりあがった、水に不便な所に部落を構えている。ひとたび自然が猛威をふるうと、我々には考えられないような打撃をうけるのであろう。こんな所に住居を構えるのも、防禦の術をもたないこの地の人々にとって、最良の策なのかもしれない。

ベースキャンプをつくる

22日、キャラバン最後の部落ナムルーに到着した。我々の雇用したコック、アン・ツェリンの部落である。彼の顔を立ててポーターの大半を近在のチベット人に代えることになった。この辺では登山隊の荷を担ぐことは、現金を得る数少ない手段の一つなので、一家総出で荷かつぎに出てきた。荷の数よりポーターの数の



ニャック 左の旗はタルチョー この村からチベットの世界

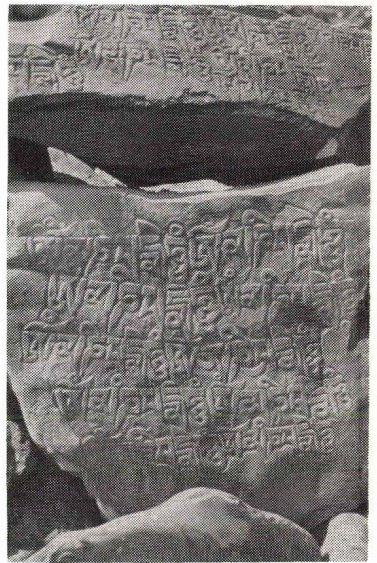
方が多く、取りあいが起こった。ポーターの扱いは慣れているはずのシェルパもこれにはお手上げだった。

モンスーンも小康になって、晴れ間もしだいに多くなった。紺碧の空に向うように急な道を進んだ。テラン谷沿いの放牧地を抜け、樹林帯の単調な登りを繰り返すと流れが緩くなり谷は急に開けた。すばらしい放牧地であった。しかし一歩足を踏み込むと、そこはいたるところに牛の糞が積っていた。ポーター達がたいせつそうに素手ですくって片付けてくれたあとに、テントを張った。

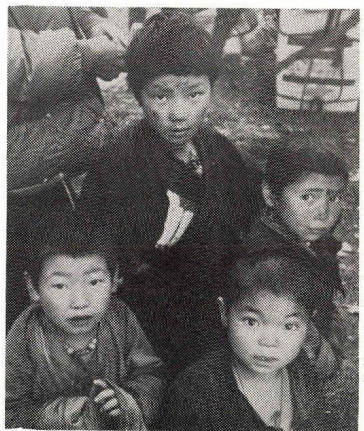
翌日、草木もまばらなジグザグ道をさらに源流に向って登ると、やわらかな草におおわれたティキ・ラに立った。背後にスリング・ヒマールからチベットの赤茶化した山々、眼下にはこれから50日あまりを過す山上の別天地シュランの放牧地が広がっていた。ここからはヒマルチュリは見えなかった。キャラバンを始めてちょうど2週間、もう9月も下旬の24日になっていた。

給料を手にしてエビス顔で帰路につくポーターを見送り、おりから降り出した小雨の中を、ベースキャンプの建設を急いだ。

(記：鈴木、藤沼)



いたる所に経文を刻んだマニ石がある



チベットの子供たち(前左は女の子)



遙かなる頂を求めて

— 登攀の記録 —

牧場のベースキャンプ

9月25日。すがすがしい4,100 mの牧場の朝であった。南に懸垂氷河がぶら下がる東尾根、東には双耳峰の美しいスリング・ヒマール、北には重たそうに雪をいただいたカンミ・ヒマールが、かがやいていた。空はどこまでも青く、国境のむこうのチベットに続いていた。モンスーンはもうすぐ明けることだろう。私達は1959年初めてここを基地とした、日本山岳会隊と同じ場所にキャンプを張っていた。今日は昨日までの長かったキャラバンの疲れをいやすため、そして明日から始まる登山活動にそなえて、荷物の整理に費すことになった。キッチン・ボーイが「グッモーニング! サーフ モーニングティー プリーズ」といって、いつもの砂糖とミルクのたっぷり入った紅茶のやかんとカップを持って、散り散りに張られたテントを回っていた。隊員達は配られた湯気の立つカップを持って、のこのこと言い出してきた。彼らは長かったキャラバンによごれて、すでに現地人のようにうすぎたなくなっていた。食料係と装備

係は、朝食前から仕事にとりかかった。午後になって、牧場がガスに覆われるころ、カトンジェで発病したバラ・サーブ(栗林隊長)をカトマンズに送り届けた加藤が、元気に到着した。

行動開始

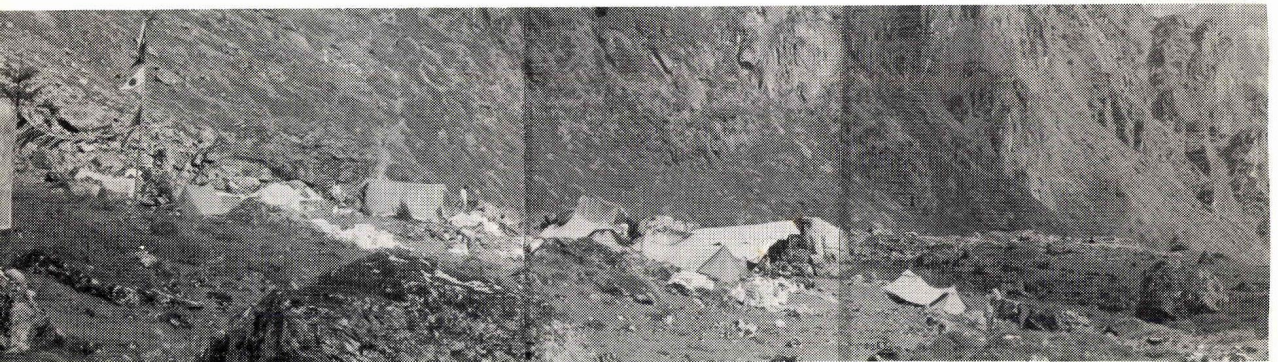
翌26日、いよいよ行動を開始した。キャンプ裏の小高い丘にかくれて見えないC1(第1キャンプ)予定地の偵察に沢口、石黒、サーダーのジャンパー、シェルパのミンマの4名がでかけていった。残る全員は足な

らしに10kg程度の荷物を背負って、4,800 mまで登ってデポしてきた。昨日はベース・キャンプの高さでも軽い頭痛をうったえる者がいたが、今日の5,000 mの初体験に夕食の食えない者も数人現われた。

C1にはシュラン谷をつめるように登っていった。4,800 m付近から新雪に腰までもぐるラッセルをしながら、シュラン谷をへずるように登っていくと、狭いリダングのゴルに出た。開けたリダング氷河の向うにはマナスルの雄姿と、重々しいP.29



安全登山の儀式をするシェルパと隊員



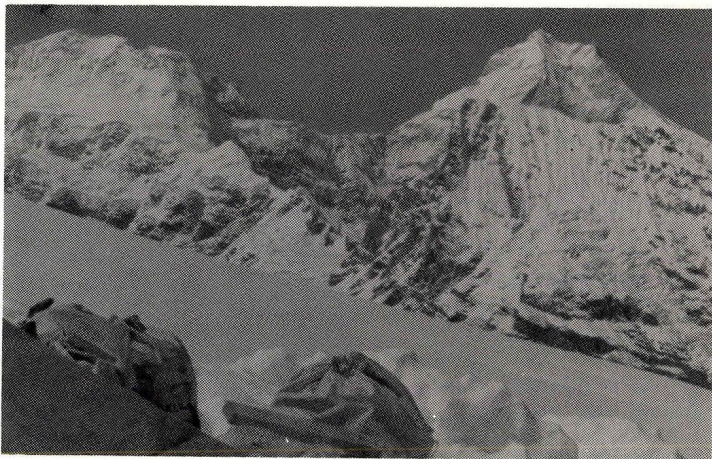
BC(ベース・キャンプ)全景 左端はラマ教の厄除け 右端は夏の間使われる放牧小屋(カルカ)

が光っていた。秀峰ヒマルチュリは頭上に長く続く東尾根にさえぎられて見えなかった。コルから30分上がって小さな雪のゆるい棚の上にC1を造ることにした。BCから6時間のところである。ここから見上げると広い雪の斜面が上に続き、幾本ものクレバスが走っていた。

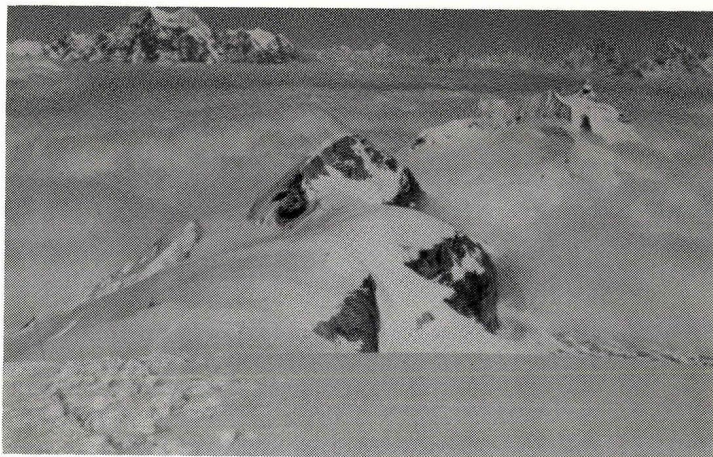
急ピッチの荷上げ

BC設営後4日目の28日、C1を建設した。土田、藤田、シェルパのハクパとペンパの4名が入った。午前中に晴れている天気は、必ず午後になると東尾根からガスが下がり、雨になる毎日であったが、しだいに長もちするようになってきた。いよいよ無風快晴が続くポスト・モンスーンの好期がすぐやってきそうであった。できるだけ早くキャンプを前に進め、最良の天気をアタックにもっていかなければならない。BCからC1は高度差1,000mあって、かなりきつい登りであったが、牛のように黙々と荷上げを続けた。シェルパの数は少なかったが、隊員が多いことが幸いした。BC（ベース・キャンプ）の荷物の山はみるみる小さくなっていった。

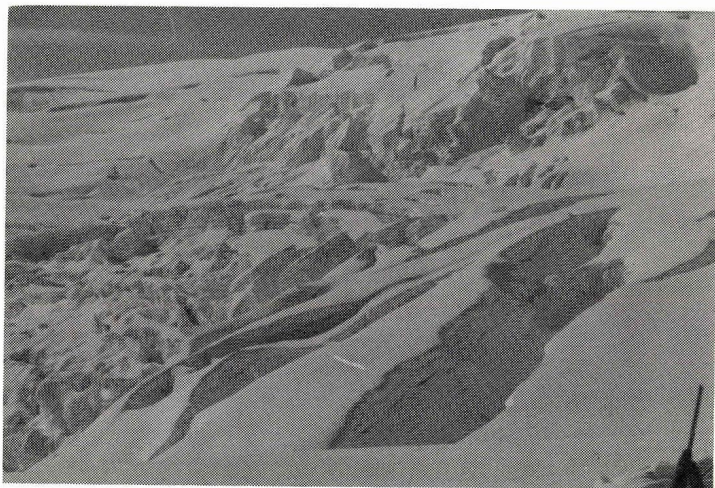
C1に入った4名はただちにC2（第2キャンプ）へのルートへの工作にとりかかった。東尾根からゆるやかに下がる懸垂氷河を、クレバスを避けそして避けられないクレバスはスノー・ブリッジを渡りゆっくりと登っていった。あえぎながら尾根に上がるとチューリン氷河から吹上げる風が汗を吹きとばしてくれた。チューリン氷河の底は見えなかったが、足もとに這い上がっている支流は無数のクレバスで積木をころがしたようであった。東尾根からチューリン氷河に落ちていくブロック雪崩の、「ドーン」という崩壊音を聞きながら、なだらかな尾根を1時間ほど登ると、最初の大雪原に出た。高度計は5,850mを示していた。ここにC



C1は目前にP.29(左)とマナスル(右)が迫る



東尾根下部C1~C2間 左に下るとC1 遠景はスリング(左)とガネッシュ(右)



C2はチューリン氷河のアイス・フォールの傍に設けられた

2を置くことにした。雪原のむこうにはラニー・ピークの鋭い槍が立ち、それと重なるようにヒマルチュリの頂がわずかに覗いていた。第2キャンプは月がかわって、10月2日に建設された。

苦しい大雪原の横断

C2には、まず土田、ハクパ、ペンパの3人が入った。他のメンバーは、嫌気のさしたC1への荷上げを営々と続けていた。当初つまづきながら歩いたリダング乗越下の雪の付着したガラ場にも、すでにきれいな踏跡ができ、ここの往来のはげしいことを物語っていた。隊員も高所に慣れてきたために、1人25~30kgを背負うようになっていた。荷上げはどんどん捗っていった。

C2を建設した翌日、土田は2名のシェルパをつれてC3へのルート



C2上部の天を突くラニー・ピークと大雪原の一部

の偵察にいった。ラニー・ピークを標的にして雪原を進んだ。モンスーンもすでに明けて、標高6,000mの雪原は、強い太陽がようしゃなく照りつけて、雪の反射と相俟って猛烈

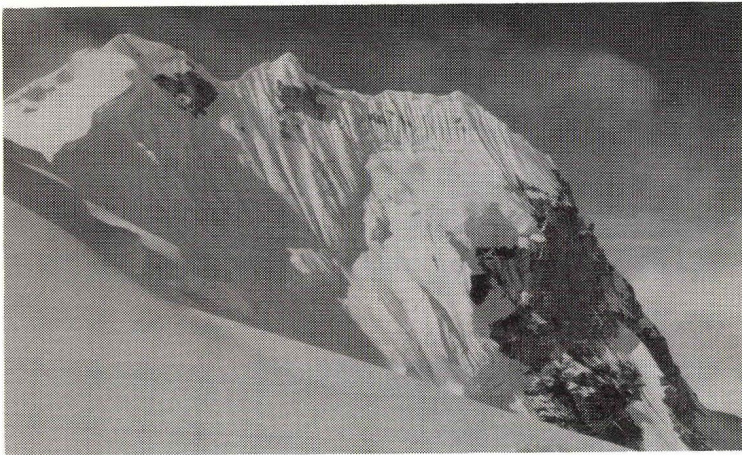
な暑さであった。ひざ程度のラッセルにも負けそうになり、歯をくいしばってひきずられるように歩かなければならなかった。

この大雪原は二段になっており、小さなクレバス帯を渡って下の雪原を越えると、ラニー・ピークの足もとまで飛行場のような雪原がさらに続いている。

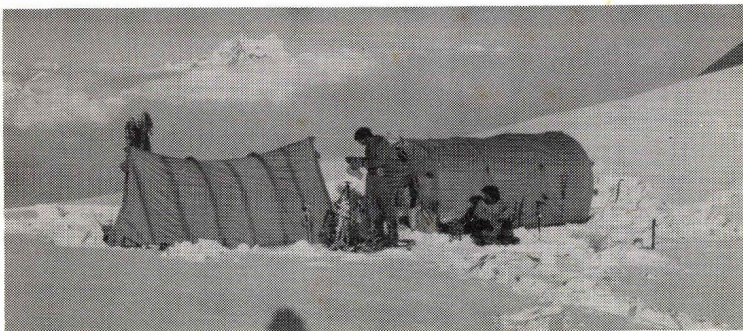
BCから上がって、休養日を返上して行動していた土田は、むくみが顔に現われ、高度障害の症状がでてきていた。ようやくラニー・ピークに近づき、C3の位置をピークの左の肩(6,450m)に決めてC2に戻った。C3の建設まではBCに下らないといっていた土田もついに下ってきた。雪にやかれ、むくみで脹れた顔は苦悶を物語っていた。代ってC2には三原、石黒、シェルパのミンマ、パサンが入り、建設資材の荷上げを始めた。さらに沢口、藤田、岡野が戦列に加わり、思いのほか手こずったC3は10月10日に建設された。

ちょうどこの日、「キーコ、キーコ」と鳴きながら、無数の雁が幾つものカギを作って、南に向かって手の屈きそうな低空を飛んでいった。

BCで雇用したチベット人ポーター「クンサン・ナムギャル」は、チベットから休まず飛んできた雁は、

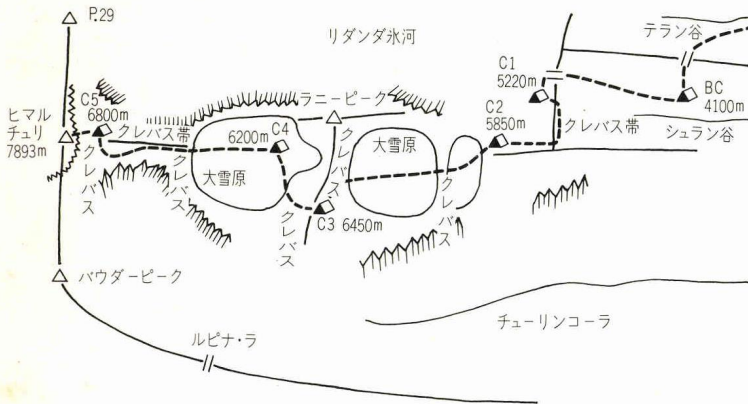


C3からみたラニー・ピーク 右下に大雪原が広がる



ラニー・ピーク肩のC3

ヒマルチュリ東尾根ルート図



つ分の物資を送らなければならないのと、C3が前進基地になるため、C3、C4間はできるだけスムーズに行動できる状態しておかなければならない。下から逆に安全で容易なルートを探さねばならなかった。

沢口、岡野が工作することになった。二人はチューリン氷河寄りの日本山岳会隊のルートと思われる雪壁をC3に向けて登っていった。なだらかな雪の斜面をラッセルしながら上がっていくと、垂直な雪壁に当たってしまった。それはかなり上の方に続

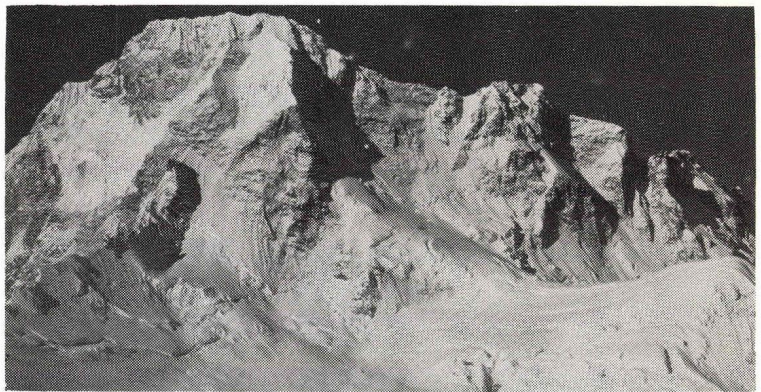
このヒマルチュリの雪を啄んで渴を潤し、インドに飛んで行くのだと話してくれた。彼等が飛んできたことはモンスーンが完全に明け、無風快晴の日が来ていることを知らせてくれた。

アイス・ビルディングの工作

C3には、沢口、藤田、ミンマ、パサンの4人が人居した。翌11日には、前線に復帰した土田そして岡野も入った。とにかくこんな尾根に何日もかかわりあってはしょうがない。10月末日にはきまって大雪が降り、山はそのまま冬にむかうという。急がなければならない。

C3とC4の間には、障害物があった。C3のあるラニー・ピークの左の肩を背中の方に下っていかなければならない。日本山岳会隊の報告によると巨大なアイス・ビルディングを下るといふ。この工作にはかなり手こずりそうであった。

さっそく沢口、藤田、2名のシェルパで工作が開始された。ほとんど垂直の壁をトラバースしたあと、急傾斜の岩まじりの氷雪壁をほぼ一直線に下った。そして300mほどのロープを固定してC3に戻った。12日には土田、岡野も加わりルートは完成したが、このルートは物資の輸送に、かなり困難が伴うことが予想された。C3から上部へキャンプ三



C3まで来て初めてヒマルチュリの全望が望まれる
C3-C4間のアイス・ビルディング帯





C3~C4間 左のピークはパウダ 右はヒマルチュリへ続く



C3~C4間の固定ロープ



C3~C4間 真下はチューリン氷河



ヒマルチュリ東壁 中央の白い壁と左の影の中の岩溝がルートとして考えられた 最高到達点は影の先端あたり

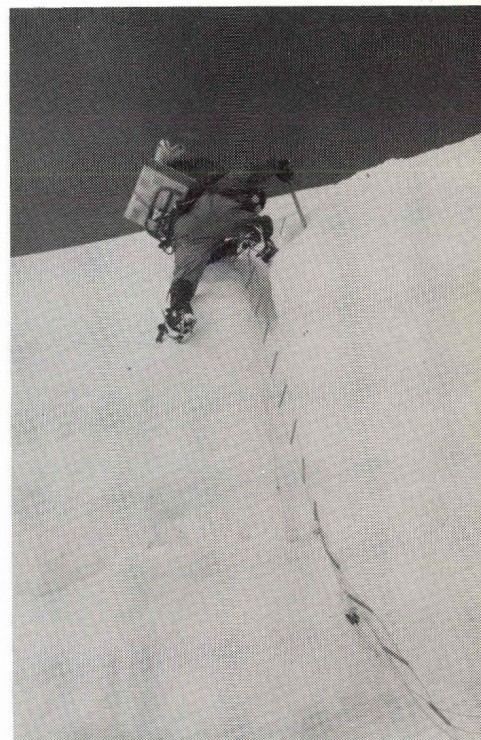
いており登ることは不可能に思えた。やや登ってから右に30mほどトラバースすると、傾斜はきついが上に登れそうな雪壁があった。表面の雪はやわらかであったが、中はかたいざらめ状の青氷であった。アイス・ハーケンを叩き込んで、フィックス用ザイルを固定しながら上に登っていった。60mほど上がると小さなクレバスのある雪の棚があった。そして棚から上にはさらに垂直な雪壁が続いていた。この棚で登り出してから初めて一息入れることになった。太陽はヒマルチュリのうしろに消えていた。ヒマルチュリは大きな黒い影になって重くのしかかってくるように見えた。影の周りの空だけができる限りの光を放っていた。正午に登り出してから5時間も経過していた。C3は近いと思いながらも、上の見通せない登攀は不安であった。うまくないことを承知で持ってきたインド製の半分凍ってしまったフルーツ缶をあげ、ほうり込むようにして口に入れた。ともかく時間はなかった。

目の前の垂直な雪壁も登る以外にルートはなかった。登ってみると、高いと思えた壁は垂直な部分は20m程度で、その上の棚とおぼしき場所はなだらかな雪の斜面であった。とつぜん斜面の上の方から「エイッパホ」というコールが聞こえてきた。遅くなって心配した土田と藤田が出むいてきてくれたのだった。C3は斜面の上にあった。

このルートは2日後に完成した。上部の壁には10mのワイヤ梯子2本を固定し、下部の壁にはスノー・バー、スクリュウ・ハーケン、アイス・ハーケンを用いてザイルを固定した。使いやすいルートであった。

東壁に迫る

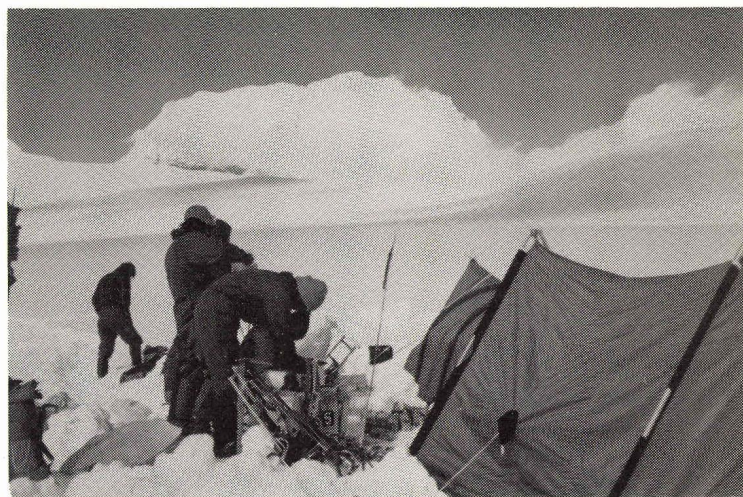
C4 (6,180 m)は16日に設営された。土田、岡野、ハクパ、ペンバの4名が入った。他の隊員は各キャンプ間の荷上げにフル稼働していた。そのころベース・キャンプでは、高度障害で倒れた隊員の治療に植木ドクターと鈴木副隊長が夜も眠れぬ毎日を過していた。40度を超える熱が



C3下の壁にはワイヤ梯子がかけられた 真下にはクレバスがあいている



ラニー・ピーク下のC4



C4からのP.29とマナスル

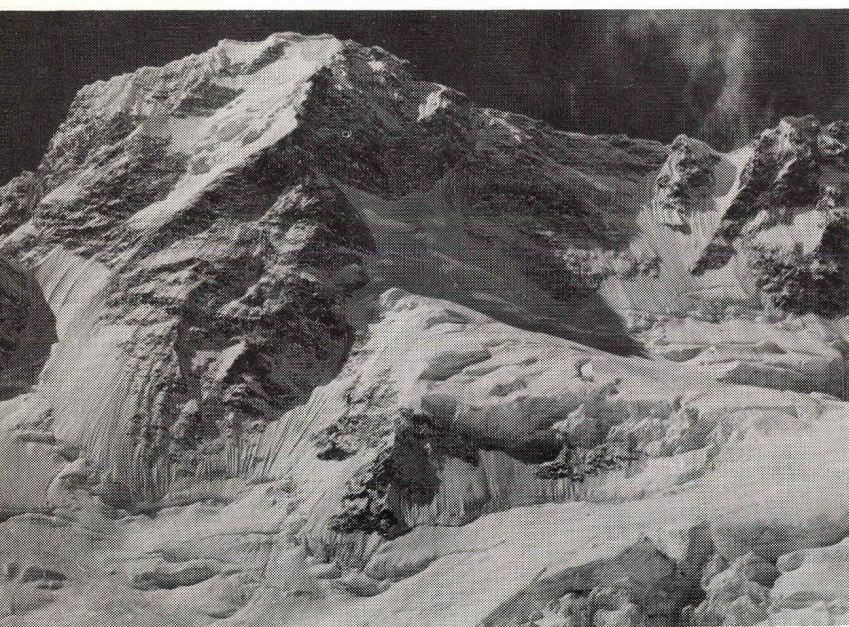
下らない者や、はげしい咳込みで衰弱している隊員が寝込んでいた。しかし治療の甲斐あって彼らは次々に戦列に復帰してきた。

C4からはC2からC3と同様の大雪原が続いていた。17日からC5の予定地の通称ジャンプ台(6,800m)に向けてルート作業を開始した。3kmにおよぶ大雪原を縦断し、クレバスを越えて登っていくとジャンプ

台の下に出た。ヒマルチュリ東壁はかぶさるように迫ってきた。上の方は黒い岩をはだけて、傾斜はかなりあるように見えた。急に高度をあげたために、胸がおさえつけられるように苦しく、這い上がるようにしてジャンプ台にたどりついた。このジャンプ台は、東壁から落下してくる雪崩から安全であるように思えた。

苦しい荷上げを繰り返して22日ようやくC5は建設された。土田、岡野、ハクバ、ペンバが入った。ここまできるとさすがに寒い。昼すぎからは太陽の恵から見離され、風も激しさを増してきた。

この2~3日、天候の悪化の兆が現われていた。いままで見られなかった雲が、東壁にまつわりついてきたのである。23日、C5の4名は、東壁7,200m付近に建設を予定しているAC(アタック・キャンプ)へのルート作業にかけた。雲に遮られて、暖かな陽光は届かなかったが視界はきいた。上からずれ落ちてきそうな雪の斜面を、上部のアタックルートを探察しながらゆっくり登っていった。右に行けば日本山岳会隊が試登したルートがあり、左に行けば登れそうな岩溝ルートに行ける中間点まで上がって小休止した。そして



冬の訪れを告げるヒマルチュリ

両ルートを双眼鏡で観察した。山岳会ルートは、厚い雪がしっかりへばり着いている。傾斜はかなりあるが登ることは可能に思えた。一方岩溝ルートの方は、下部の雪の斜面に雪崩の危険はあるが、岩溝の奥の方は傾斜が緩くなっているようである。工作に時間がかかると思うが、このルートは頂上付近に上がっていると考えられるので、山岳会ルートよりも有利であろうと判断した。

急にガスが上がってきて、渦巻くようにして東壁をつつんでしまった。登攀具をそこにデポして、いそいでC5に戻った。デポ地は7,050mであった。

C4に撤退

デポ地点からC5に下降している間に雪が降り出し、しだいに強い風雪になった。そのころC4から小林とミンマがC5用の食料の荷上げを行っていたが、天候が悪化したために、C5の手前にデポしてC4に戻ってしまった。頼みの食料が届かなかったので、C5の在庫は残すところ一日分であった。

夜半からC5はすさまじい風雪にみまわれ、東壁からは絶えず雪崩が落ちてきた。安全だと思っていたジャンプ台も、「ズーン」と気味悪い音を聞いていると、押さえ切れない不安感が込み上げてくる。ハクバ、ペンバは明日下りたいと、しきりに訴えた。とうとう予想されていた悪天候期に入ってしまった。幾度かテントの外に出て、雪につぶされないために除雪した。この雪はいつ止むのかまったくわからなかった。翌24日も風雪は荒れ狂い、C4に下ることができなかった。BCのコントロールセンター、C3の前進本部と無線で交信し、25日にできるだけ速かにC4に撤退し、体制を建てなおすことになった。

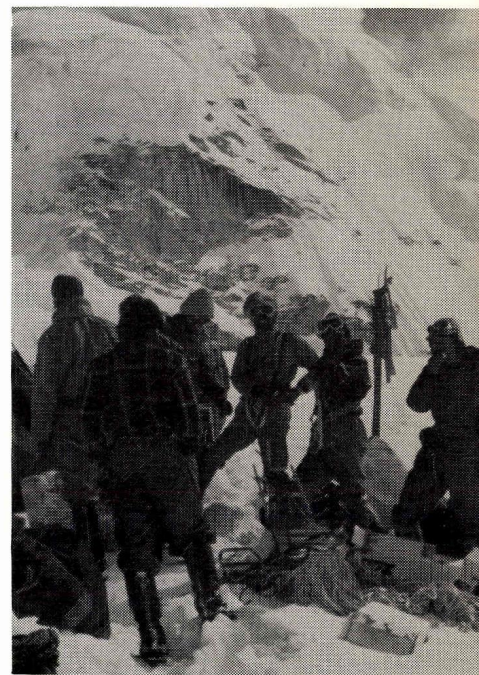
25日の撤退は、風雪の小休状態を見計らって行なわれた。個人装備の



C5下からラニー・ピーク 雪原の黒点はC4 右よりの壁がルート 後には右端がルートみを持ってC5を後にした。C4ではメンバーの小林、加藤そしてミンマが撤退する4人を助けるために風雪をついて出発した。C3からもジャンプ、パサン2名がC4の3人に加わった。下部から5名そして上部からの4名が無事合流し、何としてもC4に戻らなければならなかった。

C5からは、いきなり胸をつくラッセルであった。雪崩はいつ起きるかわからなかった。気ばかり急ぐが、ラッセルは遅々としてはかどらない。視界は10m位で、標識の赤旗を探すのは至難の技であった。風雪は容赦なく顔を叩いた。「ズシン」と腹に響く音がすぐ近くに聞えた。どこでなだれが発生したのかもわからなかった。足もとにはいくつもの亀裂が走った。ハクバはラマの御経をゆがんだ口の中で唱えていた。

C4までの半ばくらいまで下ったころ、渦巻く風雪の中から、かすかにコールが聞えてきた。上部からも応答した。それからも双方の懸命なラッセルにもかかわらず、なかなか合流することはできなかった。ようやく合流したのは午後3時をまわっ



C4の朝



C5再建を目指すが深雪と頻発する雪崩にはばまれる

C4に全員が戻ったのは夜の8時であった。C3からきてくれたジャンプー、パサンもC4に泊った。6人用のテントに9人が折り重なって一夜を明した。C3からC4に入って待機していた戸張、沢口は、両隊の合流を知ってC3に引き返した。

サーダーの懇願

26日。昨日C5の撤退をサポートしたジャンプーとパサンがC3の前進本部に戻ってきた。はげしい風雪登頂を断念しC4よりC3へ戻る

とラッセルのために、極度に疲労していた、ガックリと肩を落して、遠征を終えてほしいとうたってきた。「もう冬に入ってしまった。風が強くなる。この豪雪では東壁をやるのは不可能だ。危険が多すぎる。もうシェルパ達は全員BCに下る決心をしている」というものである。しかしまだ終わるわけにはいかなかった。BCに戻るといふジャンプーをなんとか説得し、活動に参加しな

くともよいという条件で、C3に留めさせた。これからは隊員だけで活動することになった。

風はあいかわらず衰えなかったが、雪は止んでヒマルチュリの方から晴れてきた。頂上稜線には旗雲のような雪煙があがっていた。午後になってC4からやってきたハクパとペンバは休養のためBCにそのまま下っていた。

27日。C3の隊員戸張、沢口、三原、藤田の4名はC4に下った。C4にはC5から下った土田、岡野を加えて、隊員8名が集結した。C3にはC2にいた岩井、C2にはC1の石黒がそれぞれ入った。C1は無人になった。共にかんばったシェルパのいないC4のキャンプは、ころなしに淋しかったが、久しぶりに会った隊員どうしは、疲れを忘れて夜おそくまで話し合っていた。

再度上部へ

28日。C4に戸張を残して隊員7名が出発した。土田、沢口、藤田、小林の4名がC5に上がるメンバーで、三原、加藤、岡野の3名は途中でラッセルのサポート隊であった。

空は晴れ上がっていたが、風は止んでいなかった。雪の状態は少しも良くなっていなかった。C5からの下りのように頭まで潜ることはなかったが、腰から肩までのラッセルを強いられた。雪原をようやく縦断したところで、すでに1時をまわっていた。とにかくラッセルをできるだけ伸ばそうと転げるように進んだが、ジャンプ合に上がる斜面で大規模な表層雪崩の跡が三カ所も広がっていた。斜面に踏み込むと足元の雪が滑り落ちた。まだ雪は落ちていなかった。隊員の疲労もその極に達しようとしていた。上部に上がってから一度も休養のためにBCに降られなかった隊員が3人もいた。

これ以上の前進は無理と判断して、重い足を引きづりながらC4に戻っ



た。いよいよ最終的な決断を下す時がきた。食料も余裕はなかった。隊員の休養を考えながら、C5を再建するには、少なくとも4~5日必要とした。さらにACの建設そしてアタック・ルートの工作、頂上の攻撃を考えると10日は必要であった。食料の不足もさることながら、天候がもう一度荒れたら、C5からの帰還はむずかしいものになるかも知れない。C4の隊員は言葉少なに話しあった。BCと交信して、ついに撤退を決めた。テントの外に飛び出し、押し殺すように泣いた。

各キャンプは2日間を要して撤収された。ジャンプ台のC5はとうとう回収されなかった。

BC最後の夜

11月2日。C1跡に残してきた荷物の回収もすべて終了し、帰りのキャラバンのために梱包作業にとりかかった。ヒマルチュリの懐で過した苦しくとも若さを燃やす喜びのあった日々は、もう終ろうとしていた。

その夜は、コックのアン・ツェリンがメンバー・サーブのために、わ



ヒマルチュリ最後の夜

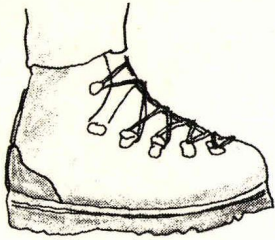
ざわざ彼の奥さんに届けさせた、上等なロキシーをあびるように飲んだ。あたりが闇につつまれる頃、大きな焚火が燃え上がった。スリング・ヒマールの双耳峰のまん中から赤味を帯びた満月が登ってきた。無邪気に酔った隊員達は、上部キャンプでシェルパに教えられた訳のわからぬネパール語の狼歌を絞り出すような声でわめいていた。突然シェルパ達が

立上がった。シェルパ・ダンスが始まったのだ。トンタッタ トンタッタと響く足踏が、月にあかるく照し出された東尾根にしばらくこだましているようであった。シェルパの一人が日本語で雪山讃歌を歌い出した。たどたどしい「ヒマルチュリさよなら ごきげんよろしゅ……」が、この遠征のフィナーレであった。

(記：戸張，土田)



冬の訪れたBCを去る



食料計画の概要

計画と国内での準備

各隊の食料報告に一応は目を通したが、基本的には、常日頃食べ慣れているもの、とくにわれわれの山登りで使用し親しんでいるもの、キャラバン、ベースでは現地調達品を中心に立案した。経費の制約もあり、とくにヒマラヤだからといって新しい試みはしなかった。カロリーの不足は糖分でビタミン類は薬品で補なうようにした。

調達はOB諸氏の関係先から大半を賄うことができた。若干の不足分は、問屋やメーカーをまわり原価に近い値で購入した。それらのいくつかは、安くしようとするあまりに失敗（主に包装の問題）したものもある。

梱包は、ハイキャンプ、ローキャンプ、ベースキャンプ、各キャンプの補充食とに分け、ハイキャンプ用は、プラスチックダンボールに、その他は、ハイピー（プラスチックフィルム的一种）の袋を作り、それに入れた。レーションの単位を細分化しすぎたため、ひじょうな手間をくい、また山に入ってから、融通性に欠けるものになってしまった。

現地での準備

目標の山が決定したのは、カトマンズ入りしてから10日目である。ヒマルチュリになった結果、約1,000人日分の食糧を追加しなければならなくなった。食える・食えないは別にして、最低限の食料を各キャンプに配置する必要から、低所キャンプの大半を現地調達品とし、用意した低所キャンプ用のレーションはすべてバラし再梱包した。

調達は、現地で作成しなおしたリストを、コック、キッチンボーイと一品ずつチェックしてから行なった。計算違いにより不足したものが2, 3あったが、コックの提示した量はかなり正確なものだった。すべて2人に任せたが、トラブルはなかった。

調達品の梱包は、野菜は持参したネットに入れてからドッコに、その他は、麻、木綿の袋に入れてから、ハイピーの袋に入れた。濡れてもさしつかえないものは木箱を使用し、キャラバン中に使用するものは、赤い布を付けて目印にした。

キャラバン及び登山期間

キャラバン中は、調味料、若干の副食類以外は現地調

達品を使用した。ほとんどがカトマンズで購入したものであるが、鶏、玉子、野菜などは、入手できればその都度購入した。しかし、それらも山奥に入るにしたがって入手困難になった。

ベースキャンプでは材料さえあればたいのものはできる。使用した材料は、キャラバン中と大差ないが、十分に時間をかけることができるので、いろいろなものが食べられた。要は決め手となる材料を多種類用意することである。

キャラバン中、ベースでの調達、献立、使用量などの指示はほとんどせず、コックに任せきりであった。幸いなことに、数多くの日本隊に参加しているコックなので作り方を教えたり、こまかな指示をする必要はなかった。

消費量のチェックも購入前にコックと基本量を十分打ち合わせていたので、それほど神経を使わずにすんだ。ただ、コックによっては、隊員が常にチェックする必要があるだろう。

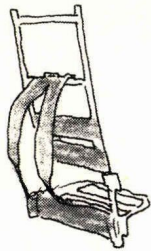
カトマンズ以外での食料の補給はむずかしい。われわれも計算違いから不足をきたし、カトマンズまで買いに行かせたものが2, 3あった。また輸送中に梱包の不備から使用不能にしてしまったものがあったが、帰路のもので補充した。

低所キャンプでは現地調達品を主にし、日本から輸送した食品を添えた。これらは調理に手間ばかりくい、とても楽しんで食事するというわけにはいかなかった。そのため、ベースキャンプで調理したものを上げ、少しでも変化を与えるように努めた。最初のうちは不平をいていた者も、空腹には勝てぬのか、うまいとはいわないまでも欲するだけの量は詰めこんでいたようである。

高所キャンプ（C4, C5, C6）は日本食オンリーで、冷凍乾燥食品を中心に5種類用意した。今までの現地食糧にへきえきしていたせいか、さほどの不平もなかったようである。

アタック用食料はビバークすることを考えて、食い延ばせば3, 4日はもつくらいに用意した。かさばらず、喉の通りのよいものを多種類そろえたが、使用するまでにはいたらなかった。

（記：藤沼）



装備計画の概要

当初の方針は、なるべく国内で使用しているものをそのまま持ち込むことであった。

しかし、7,000 mそこそこの山であれば、それも可能であったと思うが、8,000 m近い山になるとそうもいかず、たとえば靴は全員が2重靴、あるいは3重靴に変更したというように予算の限りヒマルチュリ東壁に対処した。全体的にあらゆる面で余裕のない装備であったが、また無駄なものもなかった。

一挙に700 mも高い山に突然変更となったが、装備でそのために補充したものは、アイスピトン類とカラビナを増やしたこと、テント1張をカトマンズで借用したこと、それに酸素の数を増やしたことが主なものである。

酸素は、当初10本の計画であったが、急拠30本に増やすことになった。カトマンズで先発隊がその任に当たり29本を集めることができ、ヒマルチュリのために最低限の装備を確保することができた。

登攀具

ピトン類は、ヒマルチュリに変更になった時点ですぐアイスピトン類の数を大幅に増した。ヒマルチュリの東面ルートの場合、長い氷壁がルートになるところが少なくとも2ヶ所考えられたからである。総数で200本のアイスピトンを用意した。種類、サイズは多岐にわたり、あらゆる事態に対処しうるようにした。

スノーバーはアルミのアンクル型のものを60本発注した。サイズは長短3種類（100 cm, 80 cm, 60 cm）とし、各々20本ずつ製作した。100 cmのものには、シュリング用の穴を2ヶ所あけ、全部打ち込めないような堅雪にも使用できるようにした。しかし、いずれも厚さが3 mmあり、かなり重いものになってしまった。これに市販のものを念のため5本プラスした。スノーバーはロープの固定や、設営に有効であった。

カラビナは200枚ほど準備したが、その他に下部では2.5 cm幅のナイロンテープを60~80 cmほどの長さで切ったものを100本用意した。これは主として軽量化を図るためである。シュリングは他にも用途があり、いろいろ応用できるので好都合であった。

アイスピトン、カラビナのほとんどは、これからその機能を発揮するということで、C5と最高到達点にデ

ポされたままになってしまい残念であった。

幕営具

冬用のテントは、前進キャンプが6つの計画に対し、7張しか用意しなかった。初期には、たとえばC1ではC1の6人用テントと、C5で使用する予定の6人用のものを併せて使い、C5建設が近づくとき、それを撤収して、前に進めるという方法で、テントをフルに使用した。

C3が前進基地に計画されていたので、ここだけはカマボコ型の新しいものを使用し、居住性をよくした。C6は氷壁の途中を削って設営する予定であったので、アタックの計画と併わせて、3人用のマナスル型を用意した。

その他

燃料はBCは薪、上部はすべてケロシンを使用した。コンロは、後半になると、ほとんどのものが不調になってしまった。やはり、プロパン、ブタンなどのガス類を使用した方が、あらゆる点で効率がよいといえる。

無線機は、市販の携帯用のものであるが、故障はまったくなく有効に使えた。ただ、交信可能なキャンプ間はほぼ日本で予測したとおりであった。時折、日本のタクシー会社の声も飛び込んできた。

シェルパとコックの個人装備に対する現金による支払は、規定は3,000ルピーであるが、2,500ルピーにして差額は日本から輸送したもの（セーター、靴下、手袋など）を与えた。カトマンズで彼らの装備を点検したが、隊員よりもよいものを持っているほどである。現物を支給するか、現金で渡すかは、その隊の事情によって違うが、少なくとも現金で渡した方が得策であると思う。なぜならば、隊の支給する装備の質・量について、従来ありがちであったクレームをいっさい受けなくて済むことである。これに関するトラブルはまったくなかった。

ハイポーターについては、彼らをどの高度まで使うかまた、ルートによって支給品は決ってくる。

現地の人間（我々の場合はナムルーの住人）を使う場合は、必要最低限の装備（防寒具、靴、ピッケル、アイゼンなど）をあらかじめ用意しておかなければならない。

（記：土田）

遠 征 日 誌

8月

- 1日 先発隊4名(藤沼, 三原, 加藤, 石黒)カトマンズ入り。山の変更の件で来ネ中の丹部氏(日本山岳協会)と日本大使館の菅沼氏を訪門。
- 2日 ネパール国外務省登山局のカナール氏訪門。当初予定していたホワイト・ウェーブは許可されず。ユーゴ隊が承諾すればカンパチェンを許可するとのこと。
- 4日 東京本部に打電「カンパチェン申請中」。
- 6日 外務省にパッキングリスト提出。
- 7日 カンパチェンの登山申請書提出。ユーゴ隊の到着遅れ会えず。インポート・ライセンス取得。
- 8日 隊荷回収。日本大使館より、登山局はわれわれに“ヒマルチュリ”を許可する意向であるとの連絡入る。
- 9日 ヒマルチュリを受諾。しかし、カンパの争乱を理由に、キャラバン・ルートはダロンディ・コーラに指定される。とりあえず、チェーリン氷河から東尾根への入域を承諾させる。東京本部へテレックスを打つ「ヒマルチュリ取得、日本山岳会ルートより」。
- 11日 ヒマルチュリの登山申請書提出。登山料支払う。
- 12日 登山許可証, トランシーバーの使用許可証取得。
- 13日 トランシーバー回収。東京本部へ打電。「1. 登山料支払い完了。2. 酸素のアレンジ必要か?」
- 14日 東京本部よりテレックス入る。「1. ヒマルチュリOK。2. 現地で酸素アレンジせよ」
- 21日 酸素の件で宮原氏訪門。
- 22日 キャラバン・ルートの件で外務省訪門。ケロシン給付のための申請書提出。
- 26日 キャラバン・ルート変更の申請書提出。
- 28日 シェルパの件でヒマラヤン・ソサエティに行く。
- 29日 キャラバン・ルート変更依頼のため外務省訪門。
- 30日 ヒマラヤン・ソサエティで、シェルパ, コックなど決定する。本隊栗林隊長以下10名: 羽田→バンコック。
- 31日 天候不良のため本隊到着できずカルカッタ泊り。

9月

- 1日 本隊カトマンズに到着。宿舎でシェルパと対面。
- 5日 徳久教授カトマンズ入り。
- 6日 ブリガンダキ入域の許可取得。
- 7日 ポーターの雇用のため鈴木, 沢口, 藤沼, ダクワ氏(隊の友人, 現地人), シェルパ4名はトリスリバザールに先行する。
- 10日 全隊員, シェルパ, 物資トリスリバザールに集結。

- 11日 キャラバン出発。トリスリバザール→サマリバンジャン
- 12日 サマリバンジャン→カトンジェバザール
- 13日 カトンジェバザール→ハンシバザール 栗林隊長の体調が悪いため, 加藤, ポーター1名が付添いカトマンズに引返す。
- 14日 ハンシバザール→アルガートバザール
- 15日 アルガートバザール→リンディン
- 16日 リンディン→マチャコーラ出合
- 17日 マチャコーラ出合→ドバンコーラ出合
- 18日 ドバンコーラ出合→ヤラコーラ出合
- 19日 ヤラコーラ出合→セティバシ
- 20日 セティバシ→ニヤック
- 21日 ニヤック→ビー
- 22日 ビー→ナムルー
- 23日 ナムルー→テラン谷源頭
- 24日 テラン谷源頭→シュラン谷 BC建設(4,100m)
- 25日 加藤, ポーター1名BC到着。
- 26日 登山活動開始。
- 28日 C I建設(5,220m)

10月

- 2日 C II建設(5,850m)
- 10日 C III建設(6,450m)
- 16日 C IV建設(6,200m)
- 22日 C V建設(6,800m)
- 23日 7,050m地点(最高到達点)。一日中吹雪。
- 25日 C IVに避難する。猛吹雪続く。
- 28日 登頂断念する。
- 29日 撤収開始。

11月

- 1日 撤収完了。
- 3日 BC→ナムルー
- 4日 ナムルー→ガブ
- 5日 ガブ→ダン
- 6日 ダン→ニヤック
- 7日 ニヤック→ジャガート
- 8日 ジャガート→マチャコーラ出合
- 9日 マチャコーラ出合→セティコーラ出合
- 10日 セティコーラ出合→アルガートバザール
- 11日 アルガートバザール→ツァーランゲベティ
- 12日 ツァーランゲベティ→バランブルン
- 13日 バランブルン→トリスリバザール
- 14日 トリスリバザール→カトマンズ
- 17日 カトマンズにて解散。

協力者名簿

- 青木洋
(株)秋田天然色
(株)アジア
味の素(株)神奈川営業所
RCC II エベレスト登山隊
荒尾進一
池田建設(株)東京支店
石川製函(株)
石栗真司
イトメン(株)
稲東原樹
入丸産業(株)
岩井富士雄
イワキ(株)営業第1部
梅原千治
(株)梅もと
エーザイ(株)
エースコック(株)東京支店
(株)エバニユー
大久保ヒロ子
大阪鋼材(株)東京支店
大角千鶴生
大田正一
大瀧信四郎
大塚製薬(株)
大縄忠則
(株)大林組東京本社
小川テント(株)用品部
沖哲治
オリックス
香川三津彦
科研薬化工(株)
金指美樹
金森幸男
- (株)キッコーマン
木下昌弘
木原祐輔
救世軍ブース記念病院
杏林薬品(株)
近畿電気工事(株)東京支店
黒石恒
串藤
久米睦夫
(株)小網中野出張所
航空自衛隊航空医学実験隊
興和新薬(株)
小島六郎
(株)コトブキ東京営業所
在日ネパール大使館
(株)斉藤商店
斉藤弘子
斉藤光夫
斉藤六雄
(株)阪田商会東京現像所
佐々木ブラインド工業(株)
サンエー化学工業(株)
三共(株)
(株)三荒
(株)ザンター
(株)サン海苔
塩野義製薬(株)
(有)渋清塗装
下島(株)企画室
(株)秀山荘
昭和鋼機(株)営業部
信州味噌(株)
(株)新堂染工場
菅原工業(株)製造部
- スカンジナビア航空
鈴木栄七
鈴木清
鈴木ケイ子
(有)スタジオL
ストラパックシモジマ(株)
スミス・クライン&フレンチ日本支社
瀬川輝雄
セノー(株)
ソニー(株)
大洋漁業(株)東京支社
タイ国際航空
台糖ファイザー(株)
大日精化工業(株)
高橋照
武田薬品工業(株)
竹中工務店東京支店
たなかや
田辺製薬(株)
丹部節雄
千代田鋳業(株)
(有)中条印刷
鶴岡豊彦
東海漬物製造(株)東京支店
東京インキ(株)
東京医科大学山岳会
東京医科大学病院内科学教室地下研究室
東京管材(株)
東京都山岳連盟
東京舗装工業(株)営業部
(株)東広
轟憲二
戸張憶次
鳥居薬品(株)

鳥海昭二郎
トロイ・ブロス(株)
東和商事(株)
(株)永谷園本舗
西尾公一
西沢恵子
日新化工(株)
日新化成(株)
日清製油(株)
ニッシンハウス工業(株)営業部
西堀栄三郎
(株)西村製菓
西脇重治
ニッカウキスキー(株)東京支店
日研化学(株)
日本アップジョン(株)
日本国外務省情報文化局文化2課
(社)日本山岳会
(社)日本山岳協会
日本通運(株)八重州支店貨物課
日本度量衡器(株)
日本輸入食品(株)
日本用品(株)
野口久義
(株)野澤組内地販売課
野沢謙
パイロット万年筆(株)
萬有製菓(株)
平田富士香
(株)富士昆布神奈川営業所
藤沢薬品工業(株)
フジタ工業(株)東京支店
富士通(株)東京営業部
富士電気化学(株)電池事業部

藤森工業(株)技術研究室
古川誠之助
古河電池(株)
ヘキスト・ジャパン(株)
星野和久
町田侑
町田弘
松下鈴木(株)横浜営業所
(株)松田商店
(株)マルカン酢
マルホ(株)
みすずドーフ(株)
三井農林(株)
(株)ミツカン酢
(株)美津濃
(株)ミノファーゲン製菓本舗
宮下秀樹
明治製菓(株)薬品部
名糖乳業(株)
明峰山岳会
持田製菓(株)
森永製菓(株)東京食品販売部
安岡亨
山口暁夫
山田食品工業(株)東京出張所
山田洋昭
(株)山永味噌
山之内製菓(株)
ライオン食品(株)
理研ビタミン油(株)
レンゴー(株)開発部東京販売課
六甲バター(株)横浜出張所
ロンシール工業(株)
脇坂守彦

現地協力者 (アルファベット順)

岩村 昇 (日本キリスト教海外医療
協力会)
伊藤邦幸 (日本キリスト教海外医療
協力会)
小林春尚 (駐ネパール日本大使)
Loke Darshan
Madhab P Kanal (Minister of
Foreign Affairs His
Majesty's Government
of Nepal)
宮原 巍 (Trans Himalaya Tou-
rist)
Nabin Man Singh (Himalayan
Society)
N. D. Sherestha (駐日ネパール
大使館)
Prem Bahadur Sakya
Purna R Dhakhuwa
Ranjan Bhattacharya
斉藤六雄 (串藤カトマンズ店)
三戸源司 (串藤カトマンズ店)
白井敏治 (横浜山岳協会P29登山隊)
菅沼一夫 (駐ネパール日本大使館)
The Late Nitta Man Singh
(Himalayan Society)

以上の外、青山学院当局関係者、
創立100周年記念事業関係者、体育
会関係者および山岳部OB会・緑ヶ
丘山岳会会員の多くの皆様から多大
なご援助を賜りました。ここには記
しませんが、あわせて厚く御礼申し
上げます。

O B 会會員遠征資金援助御協力者 (卒業年度順)

合計 1,655,816円

坂	岡	奈保志	田	中	英	一	齊	藤	友志郎
福	島	昌夫	草	野	順	夫	平	野	興一
小	島	隼太郎	我	部	孝	治	田	村	淳
松	尾	敏夫	岡	本	一	郎	白	井	茂
平	野	勲	中	村	賢	次	北	村	護行
土	田	正雄	天竺	桂	広	義	堀	内	拓三
井	文	文雄	鈴	木	忠	昭	小	林	宏
大	倉	寛	波	沢	恒	彌	桜	井	稔己
河	野	広次	西	堀	岳	夫	中	条	好司
田	山	幸一	畠	山	洋	一	野	口	照夫
滝	沢	哲也	指	原	豊		下河	辺	史郎
鈴	木	弘	門	石	睦	子	齊	藤	健一
前	川	忠	河	本	由起	子	平	野	和夫
前	田	清	山	脇	隆	夫	小	倉	雅之
鈴	木	敏夫	栗	原	克	幸	森	田	武良
利根	川	隆司	青	木	利	夫	若	杉	延夫
木	村	太三郎	永	井	敬	一	松	本	明子
下	山	昭五	三	須	絹	一	浅	野	裕子
室	町	庄一郎	西	村	久	志	高	橋	努
中	村	是久	柴	田	修	一			
秋	山	実	和	田	峰	子			

(61名)

御 挨拶

盛夏の候

皆様におかれましては、御健勝のことと存じお慶び申し上げます。

昨秋のヒマルチュリ遠征にあたりましては、多大な御協力と御援助を賜り、誠にありがとうございました。厚く御礼申し上げます。

帰国後、早や半年も過ぎてしまいました。時が経つにつれ、御期待に応えることができなかつたことを、いっそう心苦しく思われるこの頃でございます。

さて、遅くなりましたが、遠征の記録「一九七四年・ヒマルチュリ遠征報告」をまとめることができました。御満足いただくにはいたらない拙いものでございますが、御高覧いただければ幸甚に存じます。

最後に、多くの御迷惑に対して深く御詫び申し上げますとともに、皆様から賜りました御力添に重ねて心から御礼申し上げます。

昭和五〇年七月

新加坡中華總商會

新加坡中華總商會

本會為維護僑胞利益，特設此項基金，以資周轉。

凡我僑胞，如有意捐助者，請逕向本會辦事處洽辦。

此項基金之用途，將由本會董事會隨時核定。

特此公告，希各界人士垂注。

新加坡中華總商會 謹啟

一九二九年一月一日

新加坡中華總商會

新加坡中華總商會

新加坡中華總商會

● 会 計 報 告

隊員負担700万円、山岳部OB会会員200万円、その他援助金150万円の資金計画を立案し、ご協力をあおいだ。すべて計画どおりご援助いただけたことは、関係団体、学院当局、OB会会員諸兄のご理解と惜みないお力添の賜である。厚く御礼申しあげる所である。

総額1,102万というグルジャ・ヒマールのための予算は8,000mに近いヒマルチュリの遠征としては、かなり少ない予算であったが、いたしかたないことであった。計画の変更により現地食料費、現地装備費が大幅に増加したが、現地滞在費・交通費などを節約することによって、かろうじてまとめ上げた。

収 入 11,024,816円

学院当局 400,000
 山岳部OB会員 1,655,816
 一般法人 1,395,000
 一般個人 579,000
 隊 員 6,980,000
 利 子 15,000

支 出 11,024,816円

国 内 6,640,166
 国 外 4,384,650

国 内	6,640,166	国 外	4,384,650
事務費	143,669	登山料	196,000
装備費	1,230,185	人件費	1,712,040
食料費	300,000	交通費	138,050
保険費	575,150	通信費	28,780
薬品費	84,648	食料費	990,926
渡航費	2,880,000	装備費	934,080
輸送費	709,096	通関費	37,240
交通費	44,230	滞在費	251,134
準備費	379,708	その他	96,400
写真資材費	90,000		
残務処理費	203,480		

むすびにかえて

青山は、ついにヒマラヤに足跡を残した。青山のヒマラヤへの計画は、創立90周年を期してのラショナルであったが、これはネパールの入山禁止措置のため、単なる計画と準備だけで終わってしまった。そして今回のヒマルチュリ計画となったのだが、登頂という目標は達せられなかったが7,000メートルの標高にまで進めることができた。10年前に比べてなんという大きな前進であろうか。ヒマラヤに挑むには、何年もかけて、いろいろな経験を積重ねてゆくより他はない。その経験が先輩から後輩に受け継がれて、前進してゆくのだと考える。何時の日か、また新しいチームがヒマラヤに挑んでゆくだろう。その時にラショナルも、ヒマルチュリも、大いに役立つと信じている。

今度のヒマルチュリについては、その条件は決してよくなかった。この山に決ったのは、日本出発直前のこと、このためOB会内部では決行か延期かで論議されたが、これも当然のことであった。然し隊員たちの情熱はこの悪条件を見事に克服した。はじめてのヒマラヤ経験であったのに、隊員、シェルパ、ポーターを含めて何ひとつの事故・トラブルを起さずに終始したことは、何よりもまして立派なことであったといわなければならない。

登頂できなかったことに、なんら悔いることはない。栗林隊長以下隊員諸君たちの気持には、なにかやりきれない心残りがあるのではないかと思う。が、隊員諸君たちの足跡は永遠に残るし、この経験は、次の計画への大きなステップになることを、よく噛みしめて欲しいと思う。

青山のヒマラヤ遠征計画は、今回で大きく前進した。青山とヒマラヤの距離が急に縮ってきた。ヒマラヤが身近なものになったという気持が、改めて生れてきたのではないだろうか。然し、とは言うもの、まだまだ序にいたばかりである。私たちはこれから心も合せて、ヒマラヤへの道を一步一步確実に前進させてゆかなくてはならないと思っている。

青山学院当局、御協力をいただいた関係会社、そしてここまでお導びきいただいた西堀栄三郎博士、また現地関係者に心から御礼を申し述べるとともに、隊員諸君の健闘に心より拍手を送る。(OB会副会長 鈴木 弘)



発行所 青山学院大学ヒマラヤ遠征実行委員会
東京都渋谷区渋谷4-4-25
青山学院大学体育会山岳部内

発行者 木村 太三郎

編集者 栗林 一路

発行日 1975年5月10日